

研 究 報 告 書  
平成 29 年度：B 課題

平成 31 年 4 月 26 日

公益財団法人 がん研究振興財団

理事長 堀 田 知 光 殿

研究施設 神戸大学大学院保健学研究科

住 所 兵庫県神戸市須磨区友が丘 7-10-2

研究者氏名 中山貴美子



(研究課題)

子育て世代のがんサバイバーのエンパワメント過程に関する研究

---

平成 30 年 1 月 24 日付助成金交付のあった標記 B 課題について研究が終了致しましたので  
ご報告いたします。

# 平成 29 年度(第 50 回)がん研究助成金(一般課題 B) 研究報告書

氏名:中山貴美子  
所属機関・職:神戸大学大学院保健学研究科 准教授

## 【研究科題名】 子育て世代のがんサバイバーのエンパワメント過程に関する研究

### 1 研究の背景と目的

日本の新規がん罹患者は年間 80 万人であり、そのうち、18 歳未満の子供がいる患者は 5 万 6 千人と言われている。アメリカの National Cancer Institute の統計報告では、24%のがん患者が 18 歳未満の子供を持つと言われており、彼らの心配は、子供にとって良い親であり続けること、子供への告知、家族の中での役割を継続することの 3 つに大別されている。

一方、がん患者の子供も、発達の退行等の様々な反応があるなど、子育て中のがん患者と家族は、身体的、心理的および社会的にパワーレスになり、課題が生じやすい。治療の進歩に伴い、がんは慢性病に変化しつつある。パワーレスに陥りやすい子育て世代のがんサバイバーが、がんに伴う治療や課題に対処し、がんと共に充実した人生を送ることを支援することが重要である。

そこで本研究の目的は、子育て世代のがんサバイバーが抱える困難とエンパワメント、エンパワメントに影響する要因を明らかにすることである。なお、本研究では、「子育て世代のがんサバイバーのエンパワメントとは、母親ががんであることと子供を育てることに様々な折り合いをつけながら、主体的に自分の人生を生きていく過程」と定義した。

### 2 研究方法・研究内容

研究方法は、面接によるインタビュー調査であった。参加者は、がんの診断を受け、子供を育てながら生活している母親 5 名であった。参加者は、子供をもつがん患者のコミュニティサービスを運営する一般社団法人キャンサー・ペアレンツから紹介を受けた。調査は、参加者の自宅や研究室等の個室において、各 2 回行った。研究期間は、平成 30(2018) 年 4 月から平成 31(2019) 年 3 月であった。調査内容は、「がんを持ちながら子育てや生活をする上の困難」と、「それに対して母親がどのように治療や子育て、家事等に折り合いをつけて生活をしてこられたのか」、「エンパワメントに影響した要因は何か」であった。

分析は、質的帰納的分析手法を用いた。倫理的配慮として、参加者には、研究の目的や方法、研究参加による利益と不利益、参加の自由、同意撤回の自由、プライバシーの保護についての説明を口頭と文書で説明した。同意は、確認の上に、同意書にサインを得た。なお、本研究は、神戸大学大学院保健学倫理委員会の審査を受けてから実施した。

### 3 研究結果

#### 1) 参加者の特徴

5 名のがん種は、甲状腺がん・乳がん 1 名、乳がん 3 名、皮膚がん 1 名であった。がんのステージは、I から IIIb までであり、うち 1 名は再発されていた。年齢は、30 歳代が 2 名、40 歳代が 3 名であった。子供の数は、1 人から 3 人であった。母親ががんと診断された時の子供の年齢は、生後 1 か月から 10 歳であった。治療内容は、全員ががんの摘出手術を受け、そのうち 4 名は抗がん剤による化学療法を受けていた。4 名は、現在も継続治療中であり、術後ホルモン治療とインターフェロン治療を受けていた。がんの診断から現在までの年数は、9 か月から 6 年 8 か月であった。家族構成は、全員が配偶者と子供であった。

## 2)子育て世代のがんサバイバーががんを持ちながら子育てや生活をしていく上での困難

母親は、特に、がんの疑いから検査、診断直後、入院を含めた初期治療の際の困難を多く語った。この時期母親は、突然のがんの診断によって、「若く、子供がいる自己のがん罹患による精神的な打撃」「子供を残して死ぬことへの絶望感・不安感」「自分がいなくなることによる子供の将来への不安」を感じるが、自宅には子供がいるために「自宅でがんに伴う感情の表出ができない」状況に置かれていた。その際に、「同じように子供を持つがん患者に出会えず」、同じようにがんになつても子供を育てたモデルと出会えないことから「将来に希望が持てない」、「最適な治療を選択できる情報や経験者に出会えない」、「治療による妊娠性への影響への説明がない」等、がんの診断直後に求められる情報や人、治療方法に出会えず、孤独な中で奔走し、自己決定をせざるを得ない状況で、「子供のために自己の生命維持を最優先した治療を選択する困難さ」を抱えていた。

がんを持ちながら子育てをしている母親の場合、がんの疑いから入院までに、「受診・検査・治療による身体的・経済的・時間的負担」「自己の入院準備」と同時に、母親ががん治療をすることに伴う子育てと生活の困難を抱えていた。

母親は、「(手術直後に)授乳へのサポートがない」「母親が受診・検査・治療する際の子供の預け先の不足」「保育サービスを利用した場合の金銭的負担」「母親が入院時の子供の保育者の確保」「母親の入院時の保育所の送迎問題」「受診・検査・治療・入院時の家事の負担、家事実施者の確保」や「治療・生活に伴う配偶者との認識や役割の調整」「職場へのがん告知と仕事の調整」「子供へのがん告知の問題」「母親のがん罹患による子供の精神的動搖・不安」等の複数の困難が短期間に発生していた。しかし、がん治療中の子育てや生活への支援に関する病院や行政等による情報提供やサービスではなく、「母親のがん治療に伴う子育てや生活支援のサポートが不足」していた。そこで、母親は、病院や行政からの支援を受けられない中で、治療方法を選択し、入院準備を行い、同時に子供の授乳や保育園通園準備・送迎、食事・入浴・体調管理等の世話の手配を、自分たち家族の力だけで、短期間に集中的に調整しなければならないという切羽詰まった状況に置かれていた。

さらに、母親は、初期治療終了後も、様々な困難を抱えていた。「治療による身体的・精神的・経済的負担」と「再発・死への不安」を持ちながら、それらと並行して、家事や子育て・仕事を行わなければならず、「サポートが少ない中で、継続して複数の役割を果たし続けるをえない」状況であった。しかも、同じようにがんを持ち子供を育てているがん患者に出会えない状況がみられ、「孤独感を抱えていた」。さらに、母親は、子供の問題行動が自己のがん闘病による影響ではないかと「自分のがん罹患による子供への悪影響を恐れる」など、中長期的に困難を抱えている状況がみられた。

## 3)がんを持ちながら子育てをしている子育て世代のがんサバイバーのエンパワメント

母親は、受診から検査、診断初期には、がんの診断による衝撃を抱えながらも「子供の為に命を保つための治療を選択する」ようになっていた。そして、「自己の受診・検査を受ける」「自己の受診・検査時の子供の預け先や保育園送迎の調整」をしていた。母親は、診断から入院治療までに、「自己の入院の準備」と同時に、入院中の子育てと家庭生活の維持の為に、「(年齢に応じて)子供や家族・周囲の人に自己のがん罹患を説明し、協力を依頼」し、「自己の入院時の子育ての調整」「自己の入院時の家事の調整」「自己の病気治療による仕事の調整」等を行っていた。

母親は、退院後、抗がん剤治療やホルモン療法を継続しながらも、自分のがん罹患によって、子供の成長や生活に影響がないように、日常生活を維持することを大切にしていた。母親は、「とにかく日常生活を維持する」「困ったことは周囲に助けを求める」ようにしており、「子供の為に治療と経過観察を受け続ける」ようになっていた。母親は、日常生活を維持できるように、「配偶者と考えをすり合わせる」「家族として配偶者と協力する」ようになっていた。

母親の中には、診断や抗がん剤治療等を通して、治療や子育ての負担や不安から、様々な精神的な動搖とそれへの対応を経たことで「自分の先のことを考えすぎず、今を生きる」「自分と自分の周りの人を大切にして日々を過ごす」ように価値観が変化した人もいた。また、全員が子供の成長を樂

しみにしており、「子供の成長を嬉しく思う」「子供がいるからこそがんばれる」「子供の将来を考えて、今できることをする」ようにされていた。

母親は、子供をもつがん患者のソーシャルネットワークサービスなどの「同じ経験を持つ集団に参加」していた。また、食事会等で「がんを持つ仲間と支え合う」ことをしている人もいた。全員が、自身ががん罹患と子育てで切実に困った経験を通して、「同じ経験をしているがんの親子の苦労にも思いをよせる」「同じ経験をしている子供をもつがんの親に役に立ちたいと思う」ようになっていた。そこで、同じ経験をする人の役に立ちたいとの考え方から、本研究に自主的に参加するなど「同じ経験をしている人の役に立つ行動をとる」ように変化していた。

#### 4) 子育て世代のがんサバイバーのエンパワメントに影響する要因

がんを持ちながら子育てをしている母親のエンパワメントには、「子供」が一番の支えになっていた。「子供」と「配偶者」の存在は、母親のエンパワメントを促進する要因であるが、同時に、がん闘病と子育てを同時に行うことによる心身の負担や配偶者との認識のズレや役割調整の葛藤等もあることから、エンパワメントを阻害する要因でもあると考えられた。

がんを持ちながら子育てをしている母親への子育て支援の制度(サービス・経済的補助等)と(情報提供を含めた)システムの不足は、エンパワメントの阻害要因として顕著であった。母親ががんの治療中に利用できる家事支援制度の不足もエンパワメントの阻害要因と考えられた。母親の中には、「同じ体験をしたがんの仲間の存在」が支えになっている方もおられて、エンパワメントの促進要因であった。一方で、母親が「同じ境遇にある子育て世代のがんサバイバーと出会えない状況」は、孤独感につながり、エンパワメントの阻害要因であった。

さらに、母親は、自宅に子供がいることや配偶者への配慮から、自宅で自分の感情を出す場がなかった。母親は、中長期的に、がんの闘病や子育て、配偶者との葛藤等の課題を抱えて、複数の役割を果たしていかないといけないという状況にあることから、「身近な場所で、同じ体験をしている人と会える場がない」ことが、エンパワメントの阻害要因であった。

#### 4 考察

母親ががんを持ちながら子育てや生活をする上での困難には、受診・診断から治療選択、初期治療、治療の継続、経過観察等のがんの治療のプロセスに伴って、複数の困難が同時並行的に生じており、プロセスに応じて困難の様相が異なるという特徴がみられた。特に、受診・診断・入院・初期治療までの子供を持つ母親の入院準備期間と抗がん剤治療などの初期治療時における治療と子育て・生活の両立の過酷さが顕著であった。今後、病院と行政、関係機関が連携し、早急に子供を持つがんサバイバーへの診断前後から初期治療時の子育て支援を含めたサポート体制の充実が必要と考える。また、母親は、中長期的にも治療の継続や子育てと生活の調整を迫られる状況が継続していることから、子供をもつがんサバイバーへの中長期的な子育て支援を含むサポートが重要と考える。

今回の参加者は、困難を抱えながらも、子供のことを思い、普通の生活を継続するために様々な折り合いをつけて生活しており、母親としての強さがあった。がんを持ちながら子育てをしている母親のエンパワメントは、がんの診断・治療による身体的・精神的・経済的・時間的負担と子育てや生活との調整の困難さを抱えながらも、治療や子育て、子供の成長、再発等日常で生じる様々な出来事に対して、子供のことを最優先に考えながら、複数の自分の役割を果たし、子供の成長という喜びを持ちながら、家族とともに自分の人生を生きていく過程であった。

また、母親は、自分自身ががんと子育てで様々な困難を抱えているにも関わらず、同じ経験をしている親子への思いがあつて、何か役にたちたいと思い、研究に参加していた。これは、子育てをしながらがん治療をしていくという経験を重ねていくことで、自分なりの考え方や対処方法を獲得するとともに、同じ経験をした人に役に立ちたいという気持ちに変化し、行動を起こしていくエンパワメントの過程と考える。今回の母親は、子供を持ちながらのがん闘病という危機状況を体験したからこそ、「普通の生活の大切さ」を実感じ、自分の人生の意味を深く考え、自分の人生の物語をつくりあげながら生活していると考えた。

影響要因では、病院と行政等による子育て世代のがんサバイバーへの子育て支援の制度が不足していた。がんの診断前後から、タイムリーに、子育て・家事支援を含めてがんサバイバーを支援する制度の充実が必要と考える。また、子育て世代のがんサバイバーは、妊娠が可能な若い世代であることが多いことから、その家族の中長期的な人生設計を考えて、診断初期から治療による妊娠性への影響などの必要な情報提供ができるシステムも必要と考える。さらに、母親のがん闘病に伴い、子供には様々な反応や影響がでており、母親と家族には、子供への対応を深く考える余裕もないことから、年齢に応じた子供へのがんの告知や子供への適切な対応方法等の支援体制も必要と考える。

子育て世代のがんサバイバーは、同じ境遇の人には出会えず、孤独感を抱え、希望が持てない状況に置かれている状況がみられた。これらのことから、子育て世代のがんサバイバーが、同じ境遇の人と出会い、支え合える関係性を構築していくようなしきみや場を、身近な場所につくることが必要と考える。子育て世代のがんサバイバーは、様々な経験知と同病者への深い共感を持っていることから、経験者同士で支え合い、また診断直後の新しいがんサバイバーの支援にもつながるような、ピアソポーター育成や子育て世代のがんサバイバーのネットワークづくりも重要と考える。

がんサバイバーのニーズは潜在化していることから、ニーズを顕在化させて、がんサバイバーと病院、行政、関係機関、地域が一体となって、それぞれの力を活かし合い、がんになつても暮らしやすい地域をつくっていくことが必要と考える。

## 謝辞

最後に本研究にご参加いただいた皆様・ご家族様、一般社団法人キャンサーペアレンツ様、本研究を遂行する上で、多大なるご支援を賜りました共同研究者と貴財団に心より感謝申し上げます。